

## 2015 火 1,2 農業工学第 3 回目レポート 八田與一

八田與一さんとは、1886 年 2 月 21 日に石川県で生まれ、1942 年 5 月 8 日に長崎県付近で亡くなった日本の水利技術者である。東京帝国大学工学部で土木工学を学んだ後、台湾総督府内務局土木課の技手として台湾に渡った。そこで上下水道の整備による伝染病予防や当時着工中であった桃園大圳の完成などで活躍した。1918 年に入ると、台湾南部の嘉南平野の調査を始めた。嘉南平野は広大な面積を持っていたが、灌漑設備が不十分なためにこの地域にある 15 万ヘクタールほどの田畑は常に干ばつの危険性にさらされ、飲料水ですら不足するほど農民の生活は困窮していた。八田さんはこの平野にまんべんなく十分な水を行きわたらせるためのダムを建設する計画を提出した。これが現在の烏山頭ダムである。総工費 5400 万円(現在の 5000 億円)、満水面積 1000ha、有効貯水量 1 億 5000 万 m<sup>3</sup> といった当時アジアで最大の規模を誇るものだった。この計画書は国会で認められ、1920 年から 1930 年の 10 年間に渡って八田さんはこの工事の責任者としてダムを完成に導いた。このダムと細かくはり巡らされた 16000km の水路により、嘉南平野一帯は小麦、さとうきびが多く実る大地となり、農民の生活も豊かになった。現在では主要ダムの役割を曾文溪ダムに譲っているものの、同時代に建設された他のダムが機能不全に陥る中で、嘉南平野の土地と人びとの暮らしを潤し続けている。

八田さんと烏山頭ダムについて調べていく中で、嘉南平野の人びとの暮らしを第一に考える八田さんの姿勢が印象的だった。農業開発となると、それが品種の開発・普及にしろ、農業施設の設置にしろ、最も影響力を受けるのは地元の人びとである。開発を進めていき、さまざまな困難に突き当たると形だけでも開発を完成させること、そのときの作業効率を高めることだけに向かいがちである。しかし、開発の最終目的は地元の人びとの暮らしを豊かにすることであり、このことを常に心がけなければならない。

例えば烏山頭ダムの建設途中、日本で関東大震災が起こったことで予算が大幅に削られ、作業人員を解雇しなければならなくなったことがあった。ダムの完成だけを考えれば技術的に劣る台湾の地元の人びとを解雇するのが効率的だろう。しかし、八田さんは日本人から解雇していった。これは、技術が高い日本人はすぐに新しい仕事を見つけることができること、そして何より完成したダムを使うのは地元の人びとであるため、自分たちで使うものは自分たちで作った方が良く、という地元の人びとへの配慮からであった。

他にも、作業人員たちのために工事現場の近くに家族と一緒に快適に住める環境を整備したり、事故で殉職者が出た際には責任を感じて自ら家族に謝りに行くなど、八田さんのエピソードについては枚挙に暇がない。

烏山頭ダムという途方もなく大きな事業の建設を台湾人、日本人が協力し合って成し遂げることができたのも、今だに烏山頭ダムと八田さんが嘉南平野の人びとに愛されているのも、やはり八田さんが地元の人びとを尊重したことが 1 番の要因だと考える。開発はあくまでもひとりひとりの手で行われ、ある事業が完成した時点で終わるわけではなく、その後の人びとの暮らしが最も大事である。人びとを無視して形だけで終わらせても何も成果はなく、徒労で終わるだろう。八田さんのように、地元の人びとを置き去りにせず、第一に大切にすることで初めて、開発によって暮らしが豊かになり、さらには開発する側とされる側で友好的な関係が築けるのではないだろうか。

○参考元

<http://s.navi.com/taipei/miru/103/>

<http://ja.m.wikipedia.org/wiki/八田與一>

<https://m.youtube.com/watch?v=hqJsay0rXog>

<http://taiwantoday.tw/ct.asp?xItem=217268&ctNode=1887>